KDR モスクワ A.Buistlov、香港特電：

この 9 月にワリヤグ（遼寧）号空母は、就役する前に正式に中国海軍に移管された。当然、今後多くの海上試験が必要となり、困難な学習が始まる。最初の段階の工場での海上試験が順調に終了したことは、中国の造船技術が大幅に向上したことを示している。しかし空母の作戦性能を全て掌握することに関して、長期的に見て、実績と経験のあるロシアの指導を受けているインド海軍の方が回り道をする可能性が少ないと思われる。

実は、インド海軍のゴルシコフ（インド名 Vikramaditya）号（以下 V 艦と呼称）も今年から海上試験が始まった。改装後の V 艦は、排水量が増えて 45,000 トンとなる。改装計画によると、同空母は 30 年間就役する計画である。

中国空母は船体が完成したが、インド空母は、同時期に行われた第一段階海上試験でボイラー故障により ShevMash 造船所に引き返した。これで引き渡しの時期が遅れ来年 10 月に延びることになる。これらの動向から、工場の試験段階はインド空母に比べ中国空母の方が順調である。

しかし空母の開発計画全体を見ると、インド空母の海上試験全体、及び作戦運用の完成時期は、中国に比べると有利であることが分かる。

艦載戦闘機 MIG-29/UBK (12+4 機)、早期警戒ヘリ Ka-31 (6 機) を含む全ての武器はすでにインド側に手渡されている。これは、海上試験が完成しインド海軍に移管されれば、すぐに現役空母として就役できることを意味し、残る問題は訓練だけである。中国のワリヤグに載せる J-15 艦載戦闘機は、現段階では試験飛行を終了しておらず、生産、就役までになお一定の時間が必要である。7 月初旬にインドの MIG-29K は、ロシアのパイロット N.Diorditsa 大佐の指導の下で V 艦に対する最初の着陸に成功した。これは V 艦に対する初めての着陸訓練であり 2 番目のアレスティングワイヤーに正確にヒットした。離陸は問題なく、MIG-29K はすでに"アドミラル Kuznetsov"号の 14.3 度の甲板で試験を行っており、総合データでは滑走距離は約 180 m 必要であることが分かっている。

これらの試験の全て、及び試験飛行は最初にロシアの先達が行い、その後にインドのパイロット、技術者が習得している。このような方式を採る理由は、時

間を節約するためであり、しかも海上試験全体計画が一体化されている。ただ総合計画を2回制定する必要がある。第1次の海上試験期間は、120日間であり、第1段階の全ての試験項目を完成する。主として海上における運用試験である。

ロシアは、将来、MIG-35改良型戦闘機を搭載することを考慮し、MIG-35の原型機をV艦に派遣し試験を行うことを予定している。MIG-29K型と比べると、MIG-35は新型のR-33MK型スラストベクターエンジンを使用している。MIG-29はスラストベクターエンジンを搭載していない。そのほかレーダーも異なり、MIG-35はZHUK-AE型AESA(アクティブフェーズドアレイ)を使用し、MIG-29K、MIG-29MST、MIG-29M2が使用するのはZHUK-ME型でメカニカルスキャン型である。これはMIG-29ニューファミリーと呼称されている。

海上試験の過程で、MIG-29Kの離着陸訓練に関して、最初にロシアのパイロットが行った後、20名のインド海軍パイロットがウクライナのNITKA海軍パイロット訓練センターからやってきて研修することになる。特に夜間の離着陸訓練は相当豊富な経験を必要とする。多くのインド海軍パイロットがウクライナでロシアから直接訓練を受けている。この点は極めて重要だ。しかし中国の”遼寧”艦の戦闘機は、今から開始するのだ。

本誌の海軍問題顧問であるA.Buistlovは、風向はどうか？風力はどうか？空母と迎え風の調整は、戦闘機の離陸角度にどの程度大きく影響するのか？この方面は経験に頼るしかないと述べた。

KDRは、海軍武器の購入について、「多くの人は、特に空母のコストを単にハードウェアの価格だけで計算するが、實際上、空母の価値は、ソフトウェアの訓練と連動している。ハードはロシア以外の国からも購入できるが、ロシア製空母上での各種訓練はロシアの直接支援を受けるのが早道である。そうでないと1乃至2年の浪費に終わらず10数年の時間の浪費になる可能性が極めて高い」と考える。

船体の操縦、武器の管制、テスト等々、インドは500名の海軍軍人を派遣し、1名のロシア技術者に1乃至2名のインド軍人を張り付ける方式で訓練を実施した。インド側の代表団長はSuraj Berryである。彼は将来V艦の艦長になる人であり、完全なロシア式海軍教育を受けた。

500名のインド軍人は基幹要員であり、その後、彼らは別の1,500名の水兵を訓練する。V艦の海軍軍人は艦載機パイロットを含めると、約2,000名である。

第2段階の海上試験は、8月から開始される。元の計画は海上でのMIG-29Kの離着陸訓練である。この段階は約3か月を要する。したがって空母の海上試験、訓練で最も重要な課題は、戦闘機の離着陸訓練である。この段階の全ての飛行科目はロシア人パイロットの指導で行われる。インドのパイロットは、空母が正式にインド側に移管された後に飛行試験を開始する。このような方法は、海上試験期間中にインド側の理由で引起されるトラブルをロシア側が避けたいと思っていることを示している。当然、試験飛行期間の飛行記録及び甲板変速機の運用データは、全てインド側に提供される。

ウクライナは、インド海軍パイロットの訓練計画に参加する。現在、ゴアのMIG-29K陸上訓練基地は未完成である。したがってインド海軍パイロットの陸上訓練は、ウクライナのNITKAで行われる。このような理由からロシアとインドは、NITKAを両国以外の国家に提供することは望んでいない。その他、バレンツ海とインド洋の海水温度が異なり、この方面の新たな測定試験が必要かどうか、特にソナーの運用はどうか、解決すべき問題である。

” 改装作業は極めて面倒である。我々はこの艦の内部を見て初めて解った。およそ90%の内臓部品は交換する必要があった。したがってこの艦は、実際上90%は新品だ。特に電気配線は全て交換した”。国家武器輸出入会社のニュースソースはこのように述べた。改装計画は最終的に全体で23億ドルかかる。

インド空母の海上試験の当日、中国ワリヤーグ空母の海上試験と同様に、タグボートがV艦を押し出し、その後V艦は自艦の動力系統を始動した。

V艦の改装の難しさから、中国がワリヤーグ艦を改装した際に大きな問題に遭遇したであろうことが見て取れる。従来から本誌は、旧式空母を改装することには反対であった。

以上